



インド・パンジャブ州におけるグッジャル (Gujjar) カースト についての覚書

神戸大学 経済経営研究所
教授 佐藤 隆広

1 はじめに

わたしは、いまから14年前の2010年12月から現在まで、インド・パンジャブ州アムリトサル県 GB 村を定点観測してきました。2020年2月が新型コロナ禍による活動制限前の最後の訪問でしたが、その後、2022年8月に1回、2023年3月に1回、同8月に1回、さらに2024年8月に3回訪問することができました。最初の訪問から年に平均1回の聞き取り調査を通じて、わたしは、GB 村の社会経済変化を観察してきました。

昨年8月の調査のときに、GB 村で長く廃墟になっていたモスク（イスラム教寺院）がリノベーションされたと聞きました。早速、そのモスクを訪問すると、外観こそ、まだまだ改装する余地が十分に残ってはいるものの、内装はしっかり整えられており、とても清潔な印象を持ちました。ちょうど、リノベーションが済んだばかりのタイミングでした。

GB 村では、もともと、インドとパキスタンのイギリスからの分離独立前では、多数派のシク教徒、2番目に人口が多いムスリムおよび少数のヒンドゥー教徒の3つの宗教コミュニティが共存していました。しかし、分離独立後、GB 村からムスリムが大量にパキスタン側に移住をすることになり、GB 村にはムスリムがほとんどいなくなりました。

一体、誰がこの廃墟になったモスクを再建したのか。GB 村の住民に聞くと、パンジャブ州北部で州境を接しているヒマチャル・プラデーシュ州から移住してきたムスリムのグッジャル (Gujjar) カーストだと聞きました。グッジャルは、インド北部に広く居住している農耕カーストであり、州によっては「その他後進諸階級」(Other Backward Classes: OBC) や「指定部族」(Scheduled Tribes: ST) として認定され、政府によるアフーマティブアクションの対象になっています。また、グッジャルは家畜を伴いながら遊動するコミュニティとしても有名です¹。ちょうど、われわれの調査チームが GB 村を訪問する前後、すなわち15年ほど前から、グッジャルが水牛の放牧地として GB 村に定住し始めたようです。

パンジャブ州では1980年代半ばから1990年代半ばまでのカリスターン運動というインドからの分離独立運動があり、ヒンドゥー教徒を無差別に殺害するというシク教

¹ グッジャルについては、つぎの文献を参考にしました。S.S. Deol, "Human rights of the Muslim Gujjars in India," *International Journal of Human Rights and Constitutional Studies*, Vol. 6, No. 2, 2018.

徒の過激派の拠点が GB 村の隣接村にありました²。そのため、GB 村のヒンドゥー教徒のほとんどはこのときに他地域に移住するか、あるいはシク教徒に改宗したものと思われます。GB 村では、過去 30 年間、宗教コミュニティとして、シク教徒がほぼ 100% を占めていました。

このようなシク教徒中心の農村社会において、ムスリムであるグッジャルが新規参入してきたわけです。

2 新聞報道にみるパンジャブ州におけるムスリム・グッジャル

GB 村での聞き取りによると、定住しているグッジャルは廃墟になっていたモスクの復興について司法に訴えたようです。何年か経過して、彼らの訴えが司法当局に認められて、モスクの復興が実現したわけです。いまのところ、グッジャルと GB 村の住民との軋轢はないようですが、本当のところは分かりません。

そこで、わたしは、インドの英字新聞記事についてグーグル検索をしました。検索ワードは、「Muslim」+「Gujjar」+「Punjab」です。その結果、下記で示す 11 本の記事を見つけることができました。各記事を公開日と内容で分類をしたうえで、それらの概要をまとめてみました。

1. Chitleen K. Sethi, “Police begin head count of Gujjar muslims living near Pathankot base,” *Hindustan Times*, January 6, 2016.

<https://www.hindustantimes.com/india/police-begin-head-count-of-gujjar-muslims-living-near-pathankot-base/story-fr6ck8uo7xrL1lyQTaliuI.html>

記事[1]は、2016 年の最初期のもので、同記事によれば、パンジャブ州北部にあるパタンコット空軍基地に対するテロリストによる襲撃（6 人のテロリストと 7 人のインド側軍人が死亡）があったことを受けて、安全保障上の理由から、パンジャブ州警察がこの空軍基地付近に居住しているムスリムのグッジャルの人口調査を行いました。当時、グッジャルは、頻繁に空軍基地内に立ち入り、牛の放牧をしていました。

2. Raakhi Jagga, “Punjab: Dairy farmer Muslim Gujjars say not allowed to enter two villages,” *The Indian Express*, April 8, 2020.

<https://indianexpress.com/article/cities/delhi/dairy-farmer-muslim-gujjars-say-not-allowed-to-enter-two-villages-6352519/>

3. Rajeev Khanna, “Punjab, Himachal Gujjars Flee Communal Assault and Economic

² G. Bal and P.S. Judge, “Terrorism and rural entrepreneurship in Punjab,” *The Journal of Entrepreneurship*, Volume 10, No. 2, 2001; Gurpreet Bal, “Violence, migration and entrepreneurship: Punjab during the Khalistan movement,” *Economic and Political Weekly*, September 3, 2005.

Boycott,” *The Citizen*, April 10, 2020.

<https://www.thecitizen.in/index.php/en/NewsDetail/index/9/18577/Punjab-Himachal-Gujjars-Flee-Communal-Assault-and-Economic-Boycott?infinitemscroll=1>

4. Harpreet Bajwa, “Punjab government steps in after Muslim Gujjars find themselves ostracised for ‘spreading COVID-19’,” *The New Indian Express*, April 12, 2020.
<https://www.newindianexpress.com/nation/2020/Apr/11/punjab-government-steps-in-after-muslim-gujjars-find-themselves-ostracised-for-spreading-covid-19-2128748.html>
5. Jeffrey Gettleman, Kai Schultz and Suhasini Raj, “In India, Coronavirus Fans Religious Hatred,” *The New York Times*, April 12, 2020.
<https://www.nytimes.com/2020/04/12/world/asia/india-coronavirus-muslims-bigotry.html>
6. Prabhjit Singh, “Muslim Gujjars, Victims of Coronavirus Prejudice, Now Sell Milk with Police Protection,” *The Wire*, April 16, 2020.
<https://thewire.in/communalism/muslim-gujjars-covid-19-milk-sellers>
7. “Punjab’s Muslim Gujjars Refute New York Times’ Reporting About Sikh Gurdwara Announcements,” *Sikh Siyasat News*, April 20, 2020.
<https://sikhsiyasat.net/punjab-muslim-gujjars-refute-new-york-times-reporting-about-sikh-gurdwara-announcements/>

記事[2]から[7]は2020年4月中に公開されたもので、いずれも、新型コロナ禍のなか、パンジャブ州におけるムスリム・グッジャルの状況を報道しています。インドは、新型コロナ対策のために、同年3月末から世界で最強のロックダウンを実施しました。インドでの初期の新型コロナ感染についてメディアで大々的に取り上げられたのは、イスラム教の聖者信仰の中心地のひとつであるデリーのニザームッディーンへ巡礼に来ていたムスリムの集団感染でした（同年3月初旬）。当時のインドの健康大臣は、繰り返し、イスラム教団がインドにおけるコロナ感染拡大の原因であると指摘していました（記事[5]）。こうした背景の下、パンジャブ州のグッジャルは「感染拡大をもたらすムスリム」という理由から農村への立ち入りを制限され、市場や住民へのミルク販売なども拒否されるようになりました（記事[2][3][4][5]）。当時のパンジャブ州政府は、こうしたデマに対して警察立ち合いのもとで、グッジャルのミルク販売の支援を行っていました（記事[6]）。また、シク教の宗教指導者が「ムスリムが新型コロナ感染を広げた」とする演説を繰り返し大音響で行ったという記事[5]を否定する記事[7]もあります。

8. “Two killed in firing at Majitha village,” *The Tribune*, March 23, 2022.
<https://www.tribuneindia.com/news/amritsar/two-killed-in-firing-at-majitha-village-379852/>
9. “Punjab: All you need to know about the Muslim Gujjar-Jat clash that led to the death of

two Muslim Gujjars in Majitha,” *OpIndia*, April 5, 2022.

<https://www.opindia.com/2022/04/punjab-majitha-all-you-need-to-know-muslim-gujjar-jat-clash/>

記事[8]と[9]は、2023年3月から4月にかけて、われわれの調査村であるGB村と同じアムリトサル県に立地している村で発生したムスリム・グッジャルとシク・ジャート（シク教徒の農民カースト。パンジャブでは、政治的に優位な立場にあるドミナントカーストです）との間の紛争で、数名のグッジャルが負傷し、2名のグッジャル（18歳の少年とその叔父の35歳）が殺害され、その後、ジャート・コミュニティがグッジャルの経済活動をボイコットしていることを報道しています。殺害事件のあった村とGB村との距離は43キロメートル程度で、自動車ですぐの場所にあります。

事件は、2022年3月22日午前8時に起こりました。グッジャルの若者2人が乳牛の飼料を購入するためにトラクターを運転していました。そのとき、ジャートの若者2人が飼料を荷台に積んだ牛車で村に戻ってくるところでした。川沿いの道路中央で牛車を駐車していたときに、グッジャルの若者が牛車をどけてくれるようお願いをしました。牛車を動かそうとしているときに、トラクターが牛車にぶつかってしまい、牛車が横転してしまいました。グッジャルの若者は謝罪をしましたが、騒ぎを聞きつけた15〜20名程度の住民がやってきました。その後、騒ぎは沈静化しましたが、同日の午前11時に、ジャートの若者集団がグッジャルの居住地にやってきて、放火をしました。その結果、数名のグッジャルが負傷し、2名が死亡しました。警察は、牛車を運転していたジャートの2人の若者を拘束しました。その後、4月1日になり、この村のジャート・コミュニティは2人の拘束への異議申し立てのために、グッジャルへの飼料の販売並びにミルクの購買をボイコットするに至りました。

10. “Punjabi Camaraderie: Sikhs Restore Abandoned Mosques, Hand Them Over to Muslims,” *India Tomorrow*, July 10, 2023.

<https://indiatomorrow.net/2023/07/10/punjabi-camaraderie-sikhs-restore-abandoned-mosques-hand-them-over-to-muslims/>

記事[10]は、2023年7月、シク教徒のジャート・コミュニティが村で廃墟になったモスクをリノベーションして、それをグッジャルに寄贈したことを報道しています。これまでの記事が宗派間の衝突を報道するものであるのに対して、この記事は宗派間の協調を示すものです。こうした記事は、極めて例外的です。

11. “Tarn Taran: Gujjar woman strangled to death after domestic strife,” *The Tribune*, Mar 16, 2024.

<https://www.tribuneindia.com/news/amritsar/gujjar-woman-strangled-to-death-after-domestic-strife-601109/>

記事[11]は、2024年3月、家庭不和で実家に戻っていたグッジャルの妻が、その配偶者と家族に絞殺されるという事件を報道しています。事件のあった村は、アムリト

サル県南部と隣接している県にあります。家族の名誉を棄損するような行いをした女性がその家族によって殺されることは「名誉殺人」(Honour Killing) と呼称され、こうした名誉殺人事件は、インドでは決して珍しいものではありません。

以上の新聞報道からは、パンジャーブ州において、ムスリム・グッジャルとドミナントカーストであるシク・ジャートの間には緊張関係があることが分かります。GB 村で、われわれの調査チームが、ジャートの元サルパンチ (村長) に対してグッジャルとの関係が友好的なものかどうかを聞いたときに、「彼らは村のなかでは少数派で、われわれとの関係は今のところ平和的なものだ。しかし、彼らの勢力が大きくなってきて、自分たちの主張を通そうとしたとき、こうした関係が続くのかどうか分からない」と回答をしました。

3 GB 村におけるワクフ (Waqf) の資産

インドには、宗教に関わる非営利団体として、ムスリムに対しては「ワクフ」(Waqf) という信託団体が Mussalman Wakf Act, 1923 と Waqf Act, 1995 の 2 つの法律によって規定されています。ワクフは、ムスリムから寄進された財産を管理運営する非営利団体です (ちなみに、ヒンドゥー教徒をはじめとするムスリム以外の宗教コミュニティに関わる非営利団体は、「トラスト」(Trust) です。トラストは、Indian Trusts Act, 1882 によって規定されています)。

ワクフが保有している資産については、インド政府がオンライン・データベースを公開しています³。このデータベースを用いて、GB 村におけるワクフの資産を検索した結果をまとめたのが次表です。

表 1：パンジャーブ州のワクフ団体 (Waqf Board) が GB 村に保有している資産一覧

資産の種類	資産の名称	面積	現在の状態
モスク (Mosque)	住宅 (House)	1.9 kanal	その他 (Others)
タキア (Takia)	住宅 (House)	14.3 kanal	不法占拠 (Encroached)
モスク (Mosque)	住宅 (House)	0.55 kanal	その他 (Others)
タキア (Takia)	住宅 (House)	1.25 kanal	不法占拠 (Encroached)
墓地 (Graveyard)	農地 (Agricultural Land)	2 kanal	不法占拠 (Encroached)

資料：Ministry of Minority Affairs, *Waqf Assets Management System of India*
(<https://wamsi.nic.in/wamsi/dashBoardAction.do?method=totalRegisteredProp>)
より筆者作成。

注 1：タキア (Takia) はイスラム教スーフィー主義の礼拝施設を意味する。

注 2：1 kanal = 1/8 acre = 505.8575 m²。

³ Ministry of Minority Affairs, *Waqf Assets Management System of India*
(<https://wamsi.nic.in/wamsi/dashBoardAction.do?method=totalRegisteredProp>).

われわれの調査チームが認識していたモスクは、GB 村の公立小中学校前の市民運動場に隣接しているモスクと昨年にリノベーションされたばかりのモスクの2つのみでしたが、パンジャブ州のワクフ団体は、スーフィー主義（イスラム教における神秘主義の一種）の礼拝所タキア2拠点と墓地1拠点を彼ら自身の資産として登録していました。とくに、表中の第2行名のタキアの面積は、約1.8エーカー（14.3カナル (kanal)）もあり、これが「不法占拠」と明記されています。「自分たちの主張を通そうとしたとき、こうした関係が続くのかどうか分からない」という元サルパンチの発言は、こうしたことが念頭にあるのかもしれません。

4 GB 村のムスリム・グッジャル

先月8月はじめにGB 村を1年ぶりに訪問した折に、わたしは、幸運なことに用水路で水牛に沐浴をさせていた3人のムスリム・グッジャルに会うことができました。1人は男性で、2人は女性でした。以下は、そのときの写真です。

図1：水牛に沐浴させているムスリム・グッジャル



資料：筆者撮影（GB 村、2024年8月7日）。

その動画は、つぎから閲覧することができます。水牛はわたしが予想している以上に多く、かつ、その体躯が巨大で、わたしは恐怖を感じました。

- <https://photos.app.goo.gl/asTWxnNk7fVmPtLGA>

つぎの動画は、グッジャルの女性2名が水牛を動かしている様子を撮影したものです。

- <https://photos.app.goo.gl/uZK24SERcPgnmqsb6>

こちらは、グッジャルの青年、わたし（写真右端）と加藤篤史教授（早稲田大学）との記念撮影です。

図2：ムスリム・グッジャルとの青年との記念写真



資料：筆者撮影（GB 村、2024年8月7日）。

GB 村におけるシク・ジャートの写真も最後に示しておきます。

図3：元サルパンチへのインタビュー



資料：筆者撮影（GB 村、2024年8月7日）。

図3で、左側の黄色のターバンを巻いているのが元サルパンチであり、右側がパンジャブ農業大学のポスドクの研究者でわれわれの調査チームの一員です。シク・ジャートの多くは、ターバンを巻いており、とくに敬虔な信者は小さなナイフを腰にぶら下げています。彼らの多くは、インド人のなかでは目立って身長が高く、体格もとても立派です。元サルパンチの身長は190センチぐらいあり、体重も100キロ前後だと思われます。

図4：GB 村での公立学校での記念撮影



資料：筆者撮影（GB 村、2022年8月23日）。

図4は、2022年8月に撮影した記念写真です。左側2番目が、元サルパンチです。シ

ニアのシク・ジャートの方の典型的な服をきておられ、体格も大変立派なことがわかります。わたしは左側から4番目におりますが、わたしの身長は166センチです。参考になるでしょうか。

5 おわりに

最後に、われわれの調査チームは Centers for International Projects Trust (CIPT) に調査委託をして、昨年12月から今年2月にかけて、GB 村の社会経済調査を実施しました。回答してもらえなかった世帯はわずか5世帯程度で、809世帯に回答してもらいました。2021年3月に実施予定であったインドの国勢調査 (Census) が新型コロナ禍のために実施できず、いまだに、インドでは新しい国勢調査が実施されていません。その意味で、われわれの調査は GB 村の国勢調査に変わり得るものであると同時に、1920年代にイギリス植民地当局が、1970年代に広島大学が行った GB 村に対する大規模な社会経済調査を50年ぶりに実施したものになります。

コロンビアの架空の村マコンドの100年の盛衰を描いたガルシア＝マルケスの『百年の孤独』の文庫化が話題になっていますが、われわれの調査チームも、GB 村の100年にわたる社会政治経済変化の実証的な分析をこれから本格的に行います。